

荒蒔の歴史的民俗的環境

岩井宏實

れ、天正年間からの宮座の営みは絶えることなく続けられ、『宮座中間年代記』なる宮座文書が伝承され、ほかにも多くの関係文書を保持している。そういうした文書記録から見ると、村落の変貌の中にも、その結衆の強さと伝承性を見ることができる。

- 一 布留郷と荒蒔村
- 二 荒蒔村の生活領域
- 三 荒蒔村の宮座営

論文要旨

荒蒔（現・奈良県天理市荒蒔町）は、布留社（石上社）を中心とする信仰圏で、また布留川の水を灌漑用水として用いる生活圏をもつて構成される布留郷と称する五十余カ村の一つである。荒蒔の村の性格を考えるとき、まずこの布留郷の郷中結衆が大きな意味をもつていていることの事実を知らねばならない。

この結衆がもつとも端的に表出するのが、雨乞における儀礼で、その中でももつとも大規模なのが、「布留踊」と称される雨乞踊すなわち風流踊である。また突発的に起こった「御蔭参り」「御蔭踊り」においても郷中結衆という結衆を示している。ここに郷村の自治的結合を見ることができる。

こうした郷村的結合を基盤として、荒蒔村そのものの村落の結衆がある。その村落は勝手神社とそこに合祀あるいは境内祠として祀られる子守神社、石上神社、葛神社を中心として、誠福寺をはじめとする寺院をまた一つの精神的拠所として生活空間をつくりあげている。

かような生活領域の中で、宮座という神事組織が早くからつくりあげら